

〔書評〕

橘木俊詔・迫田さやか著

『夫婦格差社会——二極化する結婚のかたち』

中公新書、二〇一三年一月刊

鈴木 隆 芳

そう言えば、私の父は、母が働くことを喜ばなかった。

私の実家は、水道設備の小さな会社を営んでいる。仕事の規模によっては、数人の職人を雇うこともあるが、多くは父がひとりで請け負っている。私が小学生の頃、ある日、母が事務作業を手伝うと申し出たことがあった。ところが、父はそれに難色を示した。私にはその理由がよくわからなかった。家の仕事を手伝ってなにが悪いものか、としばらく腑に落ちないままであった。

当時の私には、妻の働かないことが「豊かさ」を意味するということに考えが及ばなかった。家計の助けとして妻が働くほどまでは困窮していない、という自負があったのだと思う。父は矜持を保つため拒んだのだ。

夫の所得が高ければ妻は働かない。妻の勤労は家計を補う

ことを主たる目的とする。そう説く「ダグラス・有沢の第二法則」は、かくして私の幼少期の回想と符合した。

しかし現在ではこの法則が、かなりの程度まで効力を失いつつあるという。妻が働くか否かは、夫の所得の多寡とは関係がなくなってきたらしい。かつて妻の勤労は、夫の所得を補うことで、ある程度まで格差を縮めることに貢献していた。それが現在では、もう格差是正のために作用することはない。結果、そこから生じるのが、「夫高所得・妻高所得」という組み合わせのパワーカップルと、それが反転した「夫低所得（または無職）・妻低所得（または無職）」のウィークカップルである。

それでもこうした組み合わせが無作為に生じるならば、すなわち、結婚相手を選ぶにあたって、男女ともが相手の所得

を度外視し、外見や性格のみを問うならば、結婚後に生じる経済格差は、総体としては現状を維持するにとどまる。夫婦の合計所得は、ランダムなめぐり合いの結果に過ぎないからである。ところが、現実はいかにない。結婚は格差を是正できないばかりか、その反対にますます拡大させてしまうのである。富める者はさらに富み、貧しき者は一層窮するのが今の結婚なのである。

恋愛や結婚を対象化して語ろうとすると、理念に拘泥するあまり、甘美な幻想に身を委ねてしまうことがある。結婚以前に抱いていた理想像と、実際の結婚相手が似ても似つかないことは少しも珍しくはない。ある一個人の中で、こうした現象が起こっても、それは理想と現実のギャップという常套句のもとで処理されてしまう。それでも、こうしたエピソードは、結婚を対象化するときには、どれほど真面目に取り組もうとしても、そこに理念的なフィクションが介入する余地がある、ということを物語っている。だが、そのロマンチックな装いの下には、グロテスクで容赦のない現実が横たわっている。そこを直視する勇気が私たちにはあるだろうか。

本書は、そうしたシビリアな現実を見せんがため奮闘している。格差や不平等に抗するにあたって、まずは現状を認識すべし、と説得力のあるデータを用いて論述している。そればかりか、「あきらめるな、くじけるな、頑張れ」とハートフルなメッセージまでも発しているのである。仕事とはなに

か。結婚とはなにか。幸福とはなにか。恥ずかしかったり、耳が痛かったり、深刻過ぎたり、そんな事情で、気心の知れた仲間どうしでも、そう易々と話し合えないことがここではつまびらかにされている。

婚姻は両性の合意に基づく。そうは言っても、結婚というものが、当人達にとつて、のびきならない事態であることにはなんら変わりはない。家どうしの結びつきという意味合いが弱まり、個人の意志が尊重されるようになって、結婚当事者が抱え込む心的負担はさらに増える一方である。「あの人となら大丈夫」と、一昔前ならば仲人から語りかけられた言葉を、今ではモノローグとして反芻するしかない。

ただ、こうした自問を繰り返しつつ、イメージがインフレ化するにともなつて、人は結婚において「嘘をつくこと」がますます難しくなった。執拗な内省の過程を経ることで、肥大化した自由意志が結婚に反映されるようになったからである。それは、結婚を通して個人意識のありようを見ることがいよいよ可能になったということを意味している。

結婚は嘘をつかない。語法において正確を期す言い方をするなら、結婚ではだれもが嘘をつけない。本書の説得力はここににある。

農村の男たちは、なぜ結婚できないのか。『結婚戦略』の著者ピエール・ブルデューは、この問いに向き合うことで、結婚市場に潜む「象徴的暴力」を見出した。^(注1) 農民の息子が、

農民の娘と結婚する一方で、農民の娘は非農民と結婚しているという統計から、そこには結婚戦略に相反する二重性があることが判明したのである。農民集団は、自らの息子には、農業に理解のある妻（農民の女性）を望むが、その一方、自らの娘には、農民の息子ではなく都市で働く給与所得者を夫として望んでいる。

また、エマニエル・トッドは、混淆婚（異人種間での婚姻）に注目しつつ、アメリカ合衆国の人種上の分裂を指摘している。^(注2)そこで示される九八%という数値は、アメリカ合衆国において、配偶者のいる黒人女性が、黒人男性を夫に持つ比率である。この値は、黒人女性と白人男性のカップルが、絶望的なまでに稀であることを如実に物語る。こうした徹底した人種内婚に加えて、さらには黒人女性の半数以上が未婚の母である。多人種普遍主義を表向きの理念として謳うアメリカ社会において、黒人女性の混淆婚率二・三%は、それが内側ではまったく実現していないことを露呈してしまう。

ブルデューが農村共同体の衰退を指摘し、トッドがアメリカ普遍主義の頓挫を暴く。そのいずれにおいてもカギを握っていたのは結婚である。したがって、「日本は格差社会化している」という本書冒頭の言葉は、これが結婚の実態に即したものである以上、もはや疑いようがないのである。

本書によると、五十歳時までに未婚であることを示す生涯未婚率は、二〇一〇年時点では、男性二〇・一%、女性一〇・

六%である。一方、若い男性が結婚するか、しないか（あるいはできないか）の差は、年収三〇〇万円がボーダーラインであり、それ以下の所得階級にある男性は、二十代、三十代を通じて既婚率が一〇%を割り込んでいる。こうした事態への対策として、最低賃金のアップ、同一価値労働・同一賃金、ワークシェアリング等が提言されている。

ただ、それと併せて注目したいのは、こうした経済的要因が、結婚しない理由の一位ではないということである。いまだめぐり会う機会がない、というのが男女ともにトップを占める。経済的対策を以て万事解決とはいかないところが、この問題がなかなか手強いことを示唆している。それでも、本書は、そうしたこと（所得格差の問題というよりは、恋愛コミュニケーションに関すること）もすっかりフォローしている。客観的データーを示すだけで、後は冷たく突き放して終わり、というような本ではない。

そもそも結婚とは、しようと思つてするものだろうか。家父長的因襲が色濃く残る共同体における婚姻と対比的させることで、現代の結婚の様相が見えてくる。

家父長的制度のもとでの結婚は、本人の意志とは無関係に成立してゆく。そこには、家の存続のために「独身者には、相手を好きに選ばせない」という強制力が働く。結婚相手を自由に探すということもなく、男女が出会う必要もない。また、賃金労働者でない限りは、給与所得という概念すらもなく、結婚資金が足りないという悩みが生じる余地もなかった。

そこには、今でいうところの「結婚できない理由」が存在しないのである。

一方、そうした家父長的因襲が消失した社会においては、農民が賃金労働者になるのは、なにも農業で生活できなくなつたためではない。同様に女性が働きに出るのも、夫の収入だけでは生活できないから、というわけではない。その理由として、柄谷行人は、自らの労働力を商品化することで享受できる「自由」^(注3)をあげている。両者ともが、共同体や家族への従属よりも、労働力を売って生きること、生産手段（土地）や封建的拘束（夫や家族）からの解放を望んでいるのである。結婚が、こうした自由や解放に対する制限として作用することは否めない。共同体への回帰とまでは言わなくても、そこには明らかに市場原理がもたらす自由とは相容れない理念がある。一方の領域で好ましい振る舞いが、もう一方の領域では、自己の価値を下落させてしまう。「自由」には結婚を抑制する力があるのだ。

本書は、結婚を望む若者にエールを送っている。「下手な鉄砲も数打ちや当たる」というストレートなメッセージに、ナイーブな読者は少し戸惑うかもしれない。「気になる異性がいてもどのように声をかけてよいかわからない」というのが、異性と交際する上で二番目にくる不安なのだから。

安心材料とまでは言えないが、若者を全体として見れば、彼らのコミュニケーション能力は決して低下していないよう

だ。平田オリザは、若者のコミュニケーション様式の多様性に注目しつつ、ダンスや歌が上手く、ファッションセンスにすぐれ、異文化コミュニケーションにもたけている彼らの能力を評価する。その一方で、むしろ、中高年世代の日本人男性こそが、最もコミュニケーション能力のない集団なのだという。^(注4)

それでもなお若年層に問題があるとすれば、それは「心が折れる」^(注5)という言葉に見られる「打たれ弱さ」にあると思う。結婚における個人意志の領域の拡大は、結婚相手を探すにあたって、自らの気持ちと向き合う機会をあまりに増やしてしまった。繊細というよりは、過敏になった神経の持ち主にとって、わけのわからない他者に働きかけることは、そうとうの勇気が必要とするであろう。人見知り、草食系といった言葉で、自らが相手にとって危害を加えないことをアピールしながら、あらかじめ予防線を張らなければならないほどである。最終的に結婚する相手は一人に限定されるとしても、それがだれなのかを私たちは事後的にしか知ることができない。

このことは、結婚が、結婚可能性のある複数の異性との潜在的な出会いを必要としていることを意味している。「男女ともに積極的になれ」、という著者の言葉は、そうした未来の恋人候補に働きかけよ、と言っている。最愛の人は、始めから最愛の人としてあなたの人生に登場してくることはないの

結婚した場合の世帯における消費額は、当の男女が独身時代に消費していた額の合計を超えることはない。そう言われて、なるほど、と思った。一緒に暮らすことで、家財道具や耐久消費財の多くはひとつあれば足りる。それに加え、配偶者の顔色をうかがって消費を控えることも考えられる。無駄使いをすれば、「あなた、またこんな無駄なもの買って」と怒られるかもしれない。まあ、とにかく、一緒に住めば生活費は安く済むのである。

とはいえ、ここで同時に、どうしてもある疑念が生じる。それは、こうした消費抑制効果のある結婚というものが、物を売る立場にいる人々からは、実は望まれていないののではないかということである。それまで二台売っていた自動車が一台中しか売れない。趣味に走って無茶な買い物をしようとする夫を妻が制止する。将来を考えて無駄な出費を控える。こうした一連の行動がひろく浸透すれば、ある種のマーケットは淘汰されてしまう。

売り手にとって好都合なのは、個人の意志のみで購入を決定し、それが自己実現であるかのような錯覚を抱いている消費者である。ばらばらにアトム化した彼らの欲望を「個性的な商品」で掻き立てるのはもはや難しいことではない。^(注6)

結婚件数が減れば、それにつれて子供の数も減る。少子化を危惧する手前、出産につながる結婚は奨励されて然りである。しかし、その一方で、物を売るメーカーは、あくまでアトム化した個人を求めている。サクセスストーリーになぞら

えて、自由意志と自己実現の象徴であるかのように、消費に向う個人を後押しする。

さらには、こうした個人主義を謳うことによって、離婚を後押しする風土さえもがでかがる。結婚するにあたって、執拗に自分の気持ちと向き合った夫婦にとって、離婚原因トツプの「性格の不一致」を見出すことなどは、その気になれば雑作もない。離婚後の期待効用が、結婚を続ける場合を上回るのも時間の問題である。こうした、ばらばらの個人を応援し、結婚を妨げ、独身や離婚をしめしめと思う社会のありようが、結婚を本気で歓迎するとは思えないのである。

さらに、そうしたオンリーワンの個人を求めるのは、なにも商品の売り手ばかりではない。穂村弘は、子供の名前の変遷に、肥大化した個人意識のありようを見ている。^(注7) 女性の名前としてかつて主流だった「幸子」、「優子」に託された両親の願いとは「幸せになりますように」、「優しい子に育ちますように」というものであった。こうした願いは、本人の意志でかなえるものではなく、周囲の人が協力することで始めて成就するものである。そこには、他者との宥和を願う想いが込められている。幸せになること、優しく振る舞うこと、そのためには、なにもオンリーワンとして傑出する必要はない。それらは社会において共存することを前提とした理念だからである。「幸せな人」、「優しい人」は、何人いても歓迎されるのである。

その一方で、キラキラネームと呼ばれる「怜央(レオ)」、

「美祐（ミユ）」には、こうした宥和は望まれていない。これらは「世界でただひとりのヒーローやヒロイン」として他を圧倒することを運命づけられた名前である。こんな輝いた名前の持ち主にふさわしい結婚相手はどこにいたのであろう。これほどインフレ化した親の願いを受け止めるだけの余裕が今の社会にあるだろうか。

本書を読んで、格差を克服するにあたっては、連帯感にもとづいた人のつながりが必要であると感じた。その頂点のひとつが結婚であることには強く共感する。一方で、市場経済のグローバル化は、この連帯感と相反する理念を呈する。ここでは、個人の価値が数値化・階層化されて評価される。学歴、所得はその最たるものであろう。これらの評価において劣ることは、結婚市場ではどうしても不利になる。そうした事実を包み隠さず示している本書は、読者によっては、読むにつらい本であると思う。

ただ、それでも、本書からはリフレインのように励ましの声が響いてくる。異性に向かって、そして、社会に向かって、勇気を持って一歩踏み出してごらん。ここで言っていることなんて、あなたが幸せになった後ならば、きっと笑い飛ばすことができるのだから、と。

著者が望んでいるのは、本書で示された悲観的データが通用しなくなるような社会を実現することなんだな、と思った。

註

(1) ピエール・ブルデュー著、丸山茂・小島宏・須田文明訳『結婚戦略―家族と階級の再生産』、藤原書店、二〇〇七年（原書二〇〇二年）、二七二―二七三頁。本書には、ブルデューの一九六二年から一九七七年にかけての論考が収められている。

(2) エマニユエル・トッド著、石崎晴己訳『帝国以後―アメリカ・システムの崩壊』、藤原書店、二〇〇三年（原書二〇〇二年）、一五六―一五七頁。

(3) 柄谷行人『世界史の構造』、岩波書店、二〇一〇年、二八〇―二八一頁。

(4) 平田オリザ『わかりあえないことから―コミュニケーション能力とは何か』、講談社現代新書、二〇一二年、二八頁。

(5) 内田樹・岡田斗司夫『評価と贈与の経済学』、徳間書店、二〇一三年、三〇頁。本文中での「心が折れる」の意味は、本書における文脈にもとづいている。

(6) 人のアトム化が進めば進むほど物が売れるということについて、例えば、内田樹は次のように言っている。「四人一家が消費単位である場合には家に一台テレビがあればすむが、四人がそれぞれに「私は自分の見たいものが見たい」といってプライベートテレビを要求すれば需要は四倍になる。（中略）「自我の縮小」「自我の純化」は市場が私たちに要求したものである。」、内田樹『ひとりでは生きられないのも芸のうち』、文春文庫、二〇一一年、二四〇―二四二頁。

(7) 穂村弘『もうおうちへかえりましょう』、小学館文庫、二〇一〇年（単行本二〇〇四年）、一二六―一二三〇頁。